

4 「粘土を使って1kgの重さをつくる活動」「身の回りから1kgのものを見付ける活動」を行う。

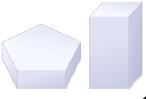


粘土でも1kgをつくることができますでしょうか？
また、身の回りにあるもので1kgをつくることができますでしょうか。

ランドセルが1kgくらいかな？
教科書とノートを組み合わせてもいいですか？



先生も粘土を使って1kgをつくってみたいけれど、Bさんのものとはずいぶん形が違いますね。



形や置き方を変えても重さが変わらないか調べてみたいと思います。



- ・繰り返し試行する活動を取り入れることで、確かな量感をはぐくむとともに、 $1\text{kg}=1000\text{g}$ ということを経験的に理解し単位換算のつまずきを減らす。
- ・同じ1kgでも様々な形の粘土を用意し、重さの保存性についても目を向けるようにする。

教師が一方向的に指導・支援するのではなく、子どもの意見を聞きながら、教師の考えも同時に伝えていくという応答関係を大切にします。主体的な学習とは、「教える」ことではなく「気付かせる」指導であると言えます。

5 自分で1kgをつくってみて、分かったことや感じたことを発表する。



今日の学習を振り返って、分かったことや感じたことを教えてください。

同じ1kgでもいろいろな大きさがあるのね。
粘土は形を変えても重さは変わらないわ。



1kgの重さが大体分かってきたわ。
重さの見当がつけば、どのほかりを使えばいいか分かるわね。



今日の学習できるようになったことを「がんばり日記」に一言書いておきましょう。

家の中にある重さを量る道具やgやkgが記されている商品を探してみよう。

- ・綿でつくった1kgを見せることで、重さは見かけの形や大きさに関係しないことが実感できるようにする。
- ・米でつくった1kg（マイ1kg）を学習後も教室に置いておき、いつでも1kgの量感を確かめることができるようにすることで、重さの見積りもりの定着を図る。

児童が交換記録ツール（がんばり日記等）に自分ができるようになったことを書き溜めていくことで自信がもてるようになります。そして、その頑張りや家庭にも伝えることで、保護者の学習内容についての理解を促し、生活との関連を図ったり、多様な評価につなげたりしていきます。

- ・日常生活へのひろがりをもてる活動を位置付けることで、学習内容を日常生活の場面で活用しようとする態度を育てる。

(3) 評価規準

- 知っているものの重さをもとに、1kgの重さをつくらうとしている。
- 重さの大きさについての豊かな感覚をもっている。

(算数への関心・意欲・態度)
(数量や図形についての知識・理解)

①一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援を行うこと

各教科の目標・内容を下学年の教科の目標・内容に替える際には、ただ単に下学年の教科書やドリルを用いればよいということではなく、教材・教具等を工夫し、児童生徒にとって学習しやすく、分かりやすく、理解しやすくする必要があります。本事例においては、児童の聴覚認知の弱さへの手立てとして、操作したり視覚的に捉えたりして学習に取り組める支援を大切にしています。

見る、聞く、触る、嗅ぐ、味わうなど五感を使い、主体的に対象に働きかける具体的な学習活動を行うことは、抽象的な思考を苦手とする子どもにとって有効な学習活動であると言えます。このような体験的な学習を通して、実感を伴った理解を図ることで、積極的に学習に取り組む態度を育てるとともに、学習への意欲を高めることができます。

④振り返りの場を設定すること

振り返りの場面で「今日はこんないいことを学習したな」「このことはこれからの学習や日常生活で使えるな」と児童生徒が実感することは、今後の学習や生活の中で見通しをもったり、学ぶことの成就感や達成感を味わったりすることにつながります。

最終的に児童生徒にどのような感想をもってほしいのか、ということイメージしながら授業づくりをしていくことが大切です。

⑥授業のねらいにそった物理的環境を整えること

本単元では、①重さの普遍単位（g、kg）について理解すること、②目的に応じて単位や計器を適切に選んで効率的に測定できるようになることをねらっています。そして、これらのねらいを達成することが、およその見当をつけ、適切な計画を立てて生活を能率化していこうとする態度の育成にも結び付いていくのです。

重さは、長さのように概測することが難しいので、次の点を意識した環境整備、指導を大切にします。

- *はかりを常備し、量る前に重さを予想し、実測値と比べる機会を多くして、重さの感覚を豊かにする。
- *身近な物の中で、代表的な重さの量感を身に付けることに努める。
- *正味の重さが記入された商品で、重さを体感的に捉える。

なお、水1Lは1kgであることを利用して、比重が水に近い牛乳、醤油など、そのかさの示されているものからその重さを捉えたり、これを媒介として重さを概測したりすることも大切です。

5. 実践例Ⅲ 算数 小学校知的障がい学級

1 単元名 C児：100までのかずのけいさん D児：直方体と立方体

◆実態把握

- ・C児（第2学年・男子）は、下学年適用により第1学年相当の学習を履修している。
- ・繰り上がりや繰り下がりのない1位数どうしの加法及び減法を正確に計算することができる。
- ・2、5、10ずつと、まとまりを作って数えることはできるが、生活の中で生かすまでには至っていない。
- ・具体物や半具体物を操作しながら自分の考えを説明する学習を積み重ね、発表することに自信をつけてきた。
- ・失敗したくないという気持ちが強く、教師の許可や確認がないまま行動することに不安を感じている。
- ・D児（第6学年・女子）は、下学年適用により第4学年相当の学習を履修している。
- ・はっきりとした色彩のパズルやビーズなどが好きで、最近ではC児の影響でパズルブロックを楽しんでいる。
- ・モデルがあれば立方体や直方体を短時間で作り上げることができる。
- ・図形概念の理解や立体の見えない部分を想像することを苦手としている。
- ・「辺」「面」などの日常生活で使用頻度の低い用語の理解は難しいので、繰り返し学ぶ場の設定が必要である。

学習環境の整備

- ・授業のはじまりと終わり以外は、パーティションで仕切られた個の学習スペースに机を移動し、それぞれの課題に集中して取り組むことができる場を確保する。
- ・ひとり学びの時間に見通しをもって取り組むことができるように、1時間の学習の流れをメニューカードで提示したり、課題解決の手がかりとなる既習の内容や考え方を学習コーナーに掲示したりする。

2 単元の目標

- C児：簡単な場合の2位数の加法及び減法の計算の仕方を考えることができる。 (第1学年 「数と計算」)
- D児：直方体や立方体について、構成要素及びそれらの位置関係に着目して観察したり、構成したり、分解したりする活動を通して、図形についての見方を豊かにする。 (第4学年 「図形」)

3 本時の学習 (C児：1/7時間 D児：2/9時間)

(1) 目標

- C児：十を単位とした数の見方を使って(何十) + (何十) の計算の仕方を説明することができる。
- D児：直方体や立方体の構成要素について理解することができる。

(2) 展開

C児 (第2学年)	教師の動き	D児 (第4学年)
<p>学習活動 教師の支援と指導上の留意点 (・)</p> <p>1 本時の学習予定を知る。 見通しをもつことができるよう、本時のメニューカードを提示して説明する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>○月○日(火)</p> <p>1 もんだい・めあて</p> <p>★ 2 ひとりまなび</p> <p>3 はっぴょう</p> <p>★ 4 れんしゅうもんだい</p> <p>5 ふりかえり</p> </div> <p>2 本時の課題をつかむ。</p> <p>おりがみ 40まいと 30まいで なんまいですか。</p> <p>どうやって考えたらよいでしょうか？</p> <p>40と30を「あわせる」からたし算になるな。でも40+30の計算ってしたことないなあ。</p> <p>問題場面を把握するための場面絵を掲示する。</p> <p>数え棒を使って数えてみよう。</p> <p>1,2,3,4…… たくさんあって、大変だな…。</p> <p>いつも数え棒を使って考えるのも、大変ですよ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>はじめてであった40+30のこたえをかんたんにもとめるほうほうをみつけたぞ。</p> </div> <p>解決の見通しをもって自力解決に向かえるよう、ひとり学びの約束を確認する。</p> <p>数え棒で大きな数を数える時は、どうすれば簡単にできるでしょうか？</p> <p>あったぞ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>〈めざせ/さんすうはかせ〉</p> <p>①これまで がくしゅうしたことをつかってみよう。</p> <p>②こたえの たしかめをしよう。</p> <p>③えやず、ぶろっくなど いろいろなやりかたで やってみよう。</p> <p>④えやず、ぶろっくを つかっ て わかりやすく おはなしてみよう。</p> </div> <p>3 計算の仕方を考える。</p> <p>今日は、ノートに絵や図をかいて考えてみましょう。どのように考えたのか、おはなししてみましょう。</p>		<p>学習活動 教師の支援と指導上の留意点 (・)</p> <p>1 本時の学習予定を知る。 見通しをもつことができるよう、本時のメニューカードを提示して説明する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>○月○日(火)</p> <p>★ 1 ふく習</p> <p>2 課題①(問題づくり)</p> <p>★ 3 課題②(図形くらべ)</p> <p>4 結果の発表</p> <p>★ 5 図形づくり</p> <p>6 ふり返り</p> </div> <p>ひとりで学習する活動に印(★)をつけて、個の学習の意識づけを図ります。</p> <p>2 前時の復習に取り組む。 復習問題(形の仲間分け、面の写し取り等)ごとにまとめた算数ボックスを準備しておき、児童がひとりで課題に取り組むことができるようにする。 課題を終えたら教師に知らせるよう伝える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>児童生徒が持っている力を発揮することができ、「〇〇まで頑張ろう」という意欲や集中力が継続する、適度な課題を設定します。そのためには、児童生徒の様子を見取り、量や時間、内容を調整していくことが大切です。</p> </div> <p>3 本時の課題をつかみ、解決に取り組む。</p> <p>今日は、3つの形を比べて気付いたことをまとめましょう。</p> <p>3つとも、昨日の仲間分けで同じグループになった形です。①と②は直方体、③は立方体です。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>直方体と立方体について調べよう。</p> </div> <p>課題①構成要素についてたずねる問題をつくる。</p> <p>それぞれの形についてたずねる問題がつかれませんか？</p> <p>「面の形は、どんな形でしょう？」といった問題がつけられるわね。</p> <p>問題づくりで戸惑う場合には、①の図形を観察して気付</p>

- 実際に枚数を数えて確かめることができるように、十の束に分けた実物を準備しておく。
- 考える手がかりとなる、既習の「10ずつまとめてかぞえる」「10が〇こで□」「□は10が〇こ」を学習コーナーに掲示しておく。

〇を40個かいていくのは、大変だなあ。

もっと簡単な図にできないかな。

数え棒を10本束にした絵が、使えそうだな。

答えが正しいか、折り紙や数え棒で確かめてみよう。

4 計算の仕方を発表する。

はじめに40枚ありました。30枚あわせませう。40、50、60、70。答えは70まいです。

10とびで数えたのですね。10のまとまりが分かる図に表すことはできませんか？

10のまとまりにして「10のいくつ分」で考えると、40+30のようなたし算の答えも簡単に求めることができますね。

しき $40 + 30 = 70$

$\text{⑩⑩⑩⑩} \quad \text{⑩⑩⑩} \quad \text{⑩⑩⑩⑩⑩⑩⑩⑩}$

$\text{③と⑩のかず} \quad 4 + 3 = 7$

こたえ 70まい

- ポイントになる式や数を板書に整理する。
- 絵と式を関連付けたり、よりよい解決方法を見出したるために、教師が聞き役になって質問する。

1対1の個別学習では、子どもの主体的な学びを引き出すために、教師が子ども役になって疑問を投げかけたり、子どもと一緒に考えたりと、子どもと応答を繰り返しながら学習を展開していくことを大切にします。

- 学んだことを使ってよりよく解決するよさを実感することができるように、類題を準備しておく。

5 評価問題をやる。

「60えんと20えんのおかしを かいます。あわせて、なんえんですか。」

- 計算の仕方を教師におはなしする時に使う10円の模型を準備しておく。

6 学習の振り返りをする。

- 今日の学習で分かったことを発表する。
- 児童のがんばりを大いにほめ、次時の予告をする。

(3) 評価規準

C児：十のまとまりを使って(何十) + (何十)の計算の仕方を考えている。

(数学的な考え方)

D児：立方体や直方体の構成要素について理解している。

(数量や図形についての知識・理解)

③見通しをもって活動できるようにすること

児童生徒が活動の見通しをもつためには、活動の手順・量・時間といった具体的な提示をすることが有効です。個別学習用の課題を、決められた場所から自分でもってきて取り組む、決められた分量ができたなら次の課題に進む、という一連の流れを繰り返し行うことで、手順に従って最後までひとりで課題に取り組む力をはぐくむことができます。そのためには、教師の事前の準備も欠かせません。

しかし、ひとりで全てをやり遂げることは容易ではありません。「分からなくなったら先生に伝えに行く」など、困った時の約束を決め、その約束にしたがって行動することができることも、将来必要とされる力です。教師が先回りをするのではなく、困ったり悩んだりする場面は、子どもにとって時には必要なハードルと捉え、子どもの自立的・主体的な活動を促す手立てや日々の継続した指導を積み重ねていくことが大切です。

⑦学ぶ機会、学び合う機会を増やすこと

複数の子どもを同時に指導する場合、一方が個の学びにならざるを得ません。それぞれの子どものねらいを達成するために、教師がどの場面で、誰に、どのように指導や支援をするのかを明確にすることが必要です。課題に取り組む子どもは、早く課題を終えたり、集中力が持続しなかったりすることがあります。予め多めに課題を準備したり、短時間でできる課題を組み合わせたたりする等の準備をし、「空白の時間」を減らし、子どもの学びを保障することが大切です。

- いたことについてたずねる問題をつくるよう助言する。
- 見取り図での問題づくりが難しい場合のために、具体物を用意しておく。
- 学習コーナーに既習の「面」「辺」「頂点」について掲示しておき、用語を用いて問題づくりができるようにする。

課題②面や辺、頂点についての問題をもとに3つの図形について調べる。

3つの図形を見て、つくった問題に答えていきましょう。

【ワークシート例】

	面の数	面の形	辺の数	辺の長さ	頂点の
①					

- 問題づくりで角度や表面積の問題等があれば認め、機会を捉えて取り扱う。
- 実際に長さを測ったり、構成要素を数えたりできるような具体物を用意しておく。

調べたことを整理した表を見て、共通するところと違うところを見付けましょう。

面の数は、同じになるわね。面の形はどうかしら？

4 調べて分かったことを発表する。

調べて分かったことを発表しましょう。同じところはどこでしたか？

面の数、辺の数、頂点の数は、どの図形も同じでした。

では、違うところはどこですか？

辺の長さが違います。①は同じ長さの辺が4本×3組、②は同じ長さの辺が4本と8本です。

同じ直方体でも辺の長さには違いがあるのですね。どうして違いが生じるのでしょうか？

立方体はなぜ辺の長さがすべて等しくなるのでしょうか？

- 正方形や長方形の定義に戻って説明できるよう問いかけを工夫する。
- 「面」「辺」「頂点」という用語を用いて、簡潔に板書する。
- 「面」「辺」「頂点」という用語を用いて、具体物を指しながら説明できるようにする。

5 立方体や直方体をつくる。

いろいろな大きさの長方形や正方形を使って直方体や立方体をつくってみましょう。

- 必要な形と枚数を判断する様子から本時の学習の成果を見取る。

6 学習の振り返りをする。

- 今日の学習で分かったことや感想を書いて、発表する。
- 児童のがんばりを大いにほめ、次時の予告をする。

<p>展開</p>	<p>栄養のことを知らなかったので、好きなものばかり食べていたよ。</p>  <p>3 解決方法を、考える。 ・話し合いによって、どうすれば朝食をバランスよく食べることができるのか考える。</p> <p>朝食を、毎日バランスよく食べるには、どうしたらよいのでしょうか。</p> <p>できるだけ作るのを手伝うか、自分で作るようにするといふ。</p> <p>少し早起きすればいいと思うよ。</p> <p>パンやご飯だけでなく、おかずも食べるようにするよ。</p> <p>どんなものかいいか調べてみたいな。</p>	<p>「なぜ、～してしまうのか」という問いでは考えにくい場合、「どんな時に、～してしまうのか」という問いにして、考えを書く等の工夫も考えられます。そのようにして、生徒が日常生活を振り返ることができるようにします。</p> <p>・必要に応じて教師も話し合いに参加し、多様な解決方法が話し合われるようにする。</p> <p>生徒が解決や対処の方法を主体的に考えることができるように、必要な情報を教師から提供することも考えられます。 個人が生活を見つめる活動や、教師による情報提供を効果的に組み合わせ、生徒の思考の流れが円滑になるようにします。</p>
<p>終末</p>	<p>4 自己の努力目標を決める。 ・自分が実践可能な具体的なめあてを決める。</p> <p>朝食を、毎日バランスよく食べるために何ができるか、自分ががんばることを考えて決めましょう。</p> <p>5 本時の学習を振り返る。 ・自分が努力することを発表し合う。</p> <p>朝食は自分で作るようにします。</p> <p>パンやご飯だけでなく、おかずもバランスを考えて食べるようにします。</p> <p>いつもより早く起きるようにします。</p>	<p>・これまでの生活経験から、自分にできそうな具体的な目標になっているのかどうかを振り返るよう助言する。</p> <p>・生活の中で目標を意識することができるように、見える場所に掲示するカードを作成する。</p> <p>・振り返る活動を大切にすることで、自己決定の重さを意識することができるようにする。</p> <p>自己評価しやすく、成果を実感することができるようにするためには、以下のような工夫が考えられます。 ○「いつ、どのように」を明確にしたり、数字を用いたりする等、具体的な行動目標として書くことができるようにする。 ○努力する期間(1、2週間程度)を設定する。 ○努力によって実現可能な目標を設定できるように助言する。</p>

(3) 評価規準

○自分の課題であることを自覚し、解決に向け話し合おうとしている。

(集団社会や生活への関心・意欲・態度)

○自分自身にできることを考えながら、朝食のとり方を整えるために必要な具体的な目標を考えている。

(集団や社会の一員としての思考・判断・実践)

①一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援を行うこと

2名の学級であっても、障がいの特性、学習理解の程度、作業能率、生活経験等の個人差が大きい場合、個々の実態に合った支援が必要になります。個別のワークシートやカードを準備することで、考えたことや記憶を整理するのを助けます。また、身の回りの環境をVTRや写真で提示することで、自分の行動を客観的に捉えることができます。このような視覚的な教材は、生徒の問題意識を高めるために効果的です。

しかし、視覚的な教材があれば事足りるというわけではなく、子どもの実態や興味・関心を様々な角度から検討し、どの場面でどのように活用するのが効果的なのかを考えることが大切です。

④振り返りの場を設定すること

自己決定したことを一週間程度やってみて、必ず振り返りをします。みんなで振り返った際には、個々のがんばりを取り入れながら、学級全体としての高まりにも触れ、生活改善の成果を実感することができるようにします。

⑤自己選択、自己決定できる場を設定すること

友だちや教師の意見を手がかりに、自分にできることを決めます。振り返りの場の設定や帰りの会(一週間程度)等での継続的な取組を評価することで、自己決定したことへの責任感や実践力を育てていきます。



6. 交流及び共同学習のねらいとポイントは、どのようなことでしょうか？

交流及び共同学習の二つの側面とは・・・

相互の触れ合いを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする「交流」の側面
教科等のねらいの達成を目的とする「共同学習」の側面

すべての子どもにとって、有意義な活動であること

共通理解

交流及び共同学習は、障がいのある子どもの経験を広め、豊かな人間性や社会性をはぐくむ上で、大きな意義をもっています。また、特別支援学級の子どもと他の学級や学校の子どもが互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていく大切さを学ぶ場として、双方の子どもの成長につながる絶好の機会です。

すべての子どもが「誰もが、かけがえのない大切な存在であり、特別支援学級で学ぶ友だちも通常の学級で学ぶ友だちもみんな仲間だ」と実感できることが大切です。また、「交流」と「共同学習」の二つの側面は分かちがたいもので、二つの側面の目的を達成することが求められます。

計画的・組織的・継続的な活動であること

共通実践

交流及び共同学習の実施に当たっては、目的や内容、配慮事項や事後指導などについて事前に十分検討することが重要です。さらに、校内の協力体制の確認をしておくことで、活動中の安全を確保することもできます。

また、急な時間変更や予定変更は、特別支援学級の子どもたちにとって大きな負担です。指導計画に基づいて実施することも大切です。

すべての子どもにとって実りある交流及び共同学習にするために

◆共通理解

- ・通常の学級の子どもと特別支援学級の子どもに対して、事前に交流及び共同学習のねらいを明確に示す。
- ・特別支援学級の子どもが主体的に学習に参加し、共に活動してやり遂げた喜びを味わうことができるようにするための指導や支援の工夫を十分に検討する。

特別支援学級に在籍する子どもが力を発揮できるようにするには、保護者の理解を得ることも重要です。PTA 総会や学級懇談会で説明したり、参観日等で積極的に授業公開をしたりするなどして、保護者への理解を促します。



◆共通実践

- ・特別支援学級の子どもが「分かった」「できた」と実感し、教科等の目標を達成することができるように、実態に応じた適切なねらいを設定する。
- ・だれが、どの場面（学習）で必要な支援を行うのか、事前の打ち合わせで明確にしておく。
 - 特別支援学級担任の役割
 - 交流学級担任・教科担任の役割
 - 交流学級の友だちとの学び合いは、いつ、どの場面で、どのような目的で行うのか？

交流及び共同学習においては、特別支援学級の子どもと交流学級の子どもを「つなぐ」ための支援を大切にします。

また、TT による指導を行っている場合には、T1 と T2 の役割を交代することが有効です。特別支援学級担任と交流学級担任が、新たな視点から子ども同士のかかわりを見取ることができます。

◆多方面からの情報収集と積極的な情報発信

- ・特別支援学級担任と交流学級担任・教科担任の双方が、特別支援学級の子どもの学習や生活の様子について積極的に情報交換を行う。
- ・活動の様子だけでなく、子どもの変容を学級通信等で情報発信し、子ども同士の相互理解と保護者の理解を促す。



◆子どもの変容の把握

- ・交流及び共同学習以外の場面での子どもの姿を見取り、交流及び共同学習の成果の評価につなげる。

例えば・・・

《特別支援学級担任》

- ・交流学級で使用する学習セット用のカバンを準備するなど、移動の負担を軽減する。
- ・交流学級の子どもと話す機会を多く持ち、特別支援学級の子どもに対する思いや校外での様子を聞いたり、特別支援学級の子どものがんばっていること等を具体的に伝えたりする。
- ・周囲の子どもの気付き（評価）や支援した時の行動のよさを価値付け、交流学級担任にも伝える。
- ・急な時間変更の連絡方法を、交流学級担任・教科担任と確認しておく。

《交流学級担任・教科担任》

- ・特別支援学級の子どもが交流学級に所属意識を持ち、双方を行き来することが当然であるという理解のもとに安心して生活できる学級集団を育て、教室環境を整える。
- ・特別支援学級の子どもが、学習活動に意欲的に取り組めるよう、班編成や座席を配慮する。
- ・特別支援学級の子どもが見通しをもって生活できるよう、急な時間変更は極力避ける。必要が生じた場合には、できるだけ早く特別支援学級担任や教務主任に連絡する。



7. 特別支援学級の授業づくりを推進する校内体制の整備として、どのようなことが必要なのでしょう？

学校全体で指導や支援を行うことができるように、子どもに直接かかわる教職員だけでなく、全教職員の共通理解や連携・調整が必要です。

一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくり

管理職

◆校内体制の確立

- ・特別支援教育についての基本的な考え方や方針の提示
- ・「担任による支援」から「学校全体での支援」への意識改革の推進
- ・特別支援学級担任や子どもを支える機動性のある組織づくり
- ・子どもの安全確保と対応方針の確立
- ・子どもや保護者への理解推進

◆適切な指導助言

- ・教育課程や授業実践に対する指導助言
- ・教育課程の評価・改善への助言

研究主任

- ・特別支援学級を含めた校内授業研究の推進

【特別支援学級を含めた校内授業研究の推進】

学校の研究主題に基づいて、特別支援学級の授業づくりの視点を明確にすることが大切です。校内授業研究における特別支援学級の授業公開を通して、個に応じた支援や学習環境の整備などを全教職員が共に学ぶことは、通常の学級における授業づくりの充実にもつながります。

教務主任

- ・教育課程編成や各教科等の年間指導計画等の作成に対する助言
- ・週時程作成における校内体制の整備と調整

【週時程の作成】

特別支援学級の子どもを最大限に伸ばすためには、個々の教育課程を考慮しながら、「特別支援学級の子ども全員が集まる時間」と「個別に指導できる時間」をバランスよく確保することが必要です。特別教室の利用や交流及び共同学習の時間の設定など、調整することの多い特別支援学級の週時程を優先的に組み、子どもの学びを保障します。

特別支援教育主任

- ・教育課程編成や各教科等の個別の指導計画の作成に対する支援
- ・子どもの実態把握への支援
- ・障がい特性や実態に応じた指導方法についての情報収集・提供
- ・教育課程の評価・改善のための校内委員会の計画的な実施及び運営
- ・専門機関等への相談のための情報収集と連絡調整

【支援、情報収集・提供、連絡調整】

実態把握の方法等、特別支援教育に関する情報を収集したり、特別支援学級担任と専門機関等をつないだりすることで、指導内容や指導方法の充実を図ります。

校内授業研究の推進 校内体制の整備・調整

学校全体で支援する体制の整備 特別支援学級担任との日々の連携

教職員

- ・子どもの障がい特性や指導・支援についての共通理解
- ・特別支援学級の子どもに対する通常の学級の子どもへの理解促進
- ・交流及び共同学習における特別支援学級担任との連携
- ・交流及び共同学習や日常生活、部活動等での観察・記録

【積極的な授業公開】

特別支援学級で学ぶ子どもの姿を実際に参観することは、特別支援学級の子どもや授業づくりへの理解を深める絶好の機会です。まずは、校内授業研究や参観日などの機会をとらえて、積極的に授業を公開していくことが大切です。



特別支援学級担任

- ・積極的な授業公開
- ・交流及び共同学習における交流学級担任及び教科担任との連携



8. 授業づくりで困った時は、どこに、どのように相談すればよいのでしょうか？

障がい特性に応じた指導内容や指導方法の工夫の手がかりをつかむために、特別支援学校のセンター的機能を活用することができます。

様々な障がいのある子どもの教育について、誰もが高い専門性や指導の経験があるわけではありません。障がい特性や一人一人の障がいの状態、教育的ニーズに応じた実践を積み重ねている、地域にある特別支援学校との連携を大切にしましょう。

- ◆知的障がい特別支援学校の教育課程の児童を初めて担任したけれど「生活単元学習」や「作業学習」って何だろう。
- ◆学習内容の理解が進まない。この内容や教材は子どもに合っているのだろうか。
- ◆今行っている教育課程は適切なのだろうか。自信がない。
- ◆文字や数を繰り返し指導しているのだけれど、もっとよい指導方法はないのだろうか？
- ◆個別の教育支援計画の作成に当たって、より専門的な意見やアドバイスが欲しい。どこに相談したらよいのだろうか。



特別支援学校に相談してください。



各特別支援学校の「特別支援教育コーディネーター」が相談窓口です。まずは、電話で相談してみましょう。

- ◆相談先に迷っている場合には、相談内容に応じて、学校や子どものニーズに適した支援が可能な特別支援学校についての情報を得ることができます。
- ◆複数の障がい種に応じた指導や支援が必要な子どもの場合には、各障がい種の特別支援学校を組み合わせることで、より有効な指導や支援を検討することができます。

～ 西部地区の特別支援学級の相談先（例）～

- ・ 県立皆生養護学校（肢体不自由 病弱・身体虚弱） 0859-22-6571
- ・ 県立米子養護学校（知的障がい）【発達障がい教育拠点】 0859-27-3411
※発達障がい教育拠点…発達障がいのある幼児児童生徒への指導・支援の充実を図るため、東部・中部・西部の各圏域に設置されています。
- ・ 県立鳥取聾学校ひまわり分校（聴覚障がい） 0859-23-2810
- ・ 県立鳥取盲学校（視覚障がい）
西部地区視覚障がい教育支援センターきらら 0859-34-5910
- ・ 県立鳥取養護学校（病弱・身体虚弱） 0857-26-3601

相談の際は、より具体的な指導内容や指導方法等を探っていくことができるように、目的や内容、今ある情報の整理をしておきましょう。

- ◆相談の目的（何のための相談なのか）
- ◆相談の内容（何についての相談なのか）
- ◆今現在行っている取組（どんな支援や指導の工夫をしているのか）
- ◆相談内容に関する子どもの情報（学校として、子どもの実態をどのように捉えているのか）



9. 特別支援学級担任の先生へのメッセージ

子どもが主体的に学ぶ姿を見ると、「教師になってよかったな。」とうれしくなります。しかし、特別支援学級の子どもの成長はゆるやかで、その成長の姿は時として見えにくいこともあり、先生方は不安になったり悩んだりすることもあるでしょう。

そのような時にこそ、授業後や一日の終わりにいつも以上にじっくりと子どもの姿を振り返ってみてください。「今日の算数では、〇〇ができるようになっていたな。」「今日の〇〇さんは、たくさん発表できて、満足そうだったな。」「次の国語の時間には〇〇をがんばりたいと張り切っていたな。」等、子どもが変容した姿がいろいろと浮かんでいませんか。

どんなに経験豊富な先生でも、納得のいく授業づくりをするのは大変難しいことです。しかし、そのように子どもの小さな変容や成長を見取り、次の授業づくりにつなげていくことで、子どもに力が付いていくのです。ですから、一段ずつ階段を上っていくように、授業づくりも少しずつ前進していきましょう。

毎日子どもと向き合い、よりよい授業をめざして日々の授業づくりを積み重ねていくことで、やがては子どもにぴったり合う学習内容や学習方法、目標や支援の方法を見付けることができます。そのようなオーダーメイドの授業づくりが、子どもの確実な成長につながります。「特別支援学級で学んでよかったな。」という子どもの笑顔のその先に、子どもたちの自立や社会参加があり、すべての人々が生き生きと活躍できる共生社会が待っています。



引用・参考文献



*文部科学省（2009）『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』

*文部科学省ホームページ

「交流及び共同学習ガイド」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/010/001.htm

*独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2014）

『知的班の研究班活動による調査 知的障害特別支援学級（小・中）の担当教員が指導上抱える困難やその対応策に関する全国調査 一研修、支援体制からの考察一（平成24年度～25年度）調査報告書』

*鳥取県教育委員会（2010）『保存版 特別支援学級担任のための手引』

*鳥取県教育委員会（2011）『保存版 特別支援学級担任のための手引 第2号』

*鳥取県教育委員会東部教育局（2014）『元気の出る 特別支援学級担任のための手引（実践編）』

*茨城県教育研修センター特別支援教育課（2013）

『特別支援学級スタート応援ブック【学級経営編】』『特別支援学級スタート応援ブック【授業づくり編】』

*さいたま市教育委員会（2012）『特別支援学級担任の手引き 一特別支援教育の充実を目指して一』

*秋田県総合教育センター（2011）『特別支援学級新担任の手引』

*学研『実践障害児教育』〈2012年8月号〉



西部教育局は、市町村教育委員会と連携し、各学校の特別支援学級の授業づくりを支援します。

西部教育局学校教育担当は、市町村教育委員会と連携し、各学校のニーズに応じて特別支援学級の授業づくりを支援していきます。「よりよい支援の方法はないのだろうか?」「子どもが主体的に学ぶ授業にするにはどうすればよいのだろうか?」など、特別支援学級の授業づくりに関する疑問や悩みがありましたら、お気軽に声をおかけ下さい。

【連絡先】

西部教育局学校教育担当

TEL (0859) 31-9773 ~ 9776

FAX (0859) 35-2096

E-mail : seibukyoiku@pref.tottori.jp

一人一人の教育的ニーズに応じた「オーダーメイドの授業」を積み重ねていくことが、子どもの自立や社会参加につながるのじゃ。子どもの力を最大限に伸ばす授業づくりを大切にしたいのう。



平成 27 年 4 月 発行

